

# 極めるー住民参画のクオリティー



3館には、表現者、それを支えるスタッフ、企画者、さらには演劇、音楽、美術、映画などありとあらゆるジャンルへの参加参画の受け皿が用意されており、それぞれ活発な活動が展開されています。この長所をさらに活かすには、「参加のしやすさ」と「習熟した住民との活動提携」のクオリティを上げることがです。これは「住民参加（行政主導）→住民参画（協働）→住民主役（行政支援）」という活動の成熟過程に伴う参加参画のグラウンドデザインを見直し、これまでやってきたことにひと工夫加えることで、新たに参加する人が参加しやすい環境を充実させることとなります。

また、自主的に活動できる住民（個人および団体）がホールと提携してまちのためにどんどん自主的な活動を繰り広げていき、必要な支援をホール側が行なっていくような環境をつくることとなります。

## 1. 参加のしやすさ

これから活動に参加しようと思っている住民にとって、すでに活動している組織に入り、経験のある住民スタッフといきなり一緒に活動しようとするのは敷居が高いでしょう。

そこで、自分の興味や適性を感じた上でそれぞれの組織に入っていくことができるようにするため、短い期間の中で様々な活動が体験できるワークショップをつくっていきまます。これまでに表現者の参加拡大の仕掛けを作ってきましたので、これからは企画、舞台技術、フロントスタッフなど、文化ホールの運営を支える側のためのワークショップをつくっていくことが大切です。

モチベーションを保つには、例えば椅子並べを行うボランティアにしても、ディスプレイして並べてみてチェックする、というように、社会的責任と達成感を得られるように、きめ細かいマネジメントが大切です。たくさん種類を増やして体系化していくことで参加の輪を拡大するためのツールが広がります。

## 学校のように

同じ時期に入学し同じ時期に卒業する、学校のように常に同じようなサイクルで入れ替わるという仕組みをあえて作ることで新たな参加者が参加しやすくなり、卒業生が既存の組織に毎年加入していくようになる、組織には常に新しい風が入る仕組みが整います。この仕組みを表現者育成のためだけではなくスタッフ養成にも応用していくことで、実行委員会やボランティア組織の新陳代謝を促すことにもつながります。

ここで大切なことは、初めての人が参加しやすい環境を整え、それが館の受け皿である組織につながり、その組織自体もこの関係を望んでいることです。新たな人の参加、輪の拡大は、組織や館の活性化には欠かせません。

企画、広報、裏方、表方運営、アウトリーチにまで住民が参加・参画しているのが小美玉の文化の特長です。すでに実践活動している事業や組織に入る前のワークショップである『学校的体験』を仕組みとして用意することで、より参加・参画の輪の拡大につながり、さらには参加者自身が様々な体験をすることで活動している住民同士が互いの理解を深めることにつながります。



.....  
**榎木元成**  
 小美玉市まるごと文化ホール計画  
 策定プロジェクトチーム  
 .....

## これからの文化施設への想い

「文化」。若者にとってピンとくる言葉ではありません。自分の生活とは異質な何か特別なもののように感じます。思い浮かぶのは古墳や地元の行事といったところでしょう。私は、文化とは「その時代にいた人たちの活動」だと思っています。そしてふと思いました。「自分たちの生きた時代はどんな文化だったと言われるのかな。」

私は、未来の人たちに「小美玉市の文化施設は若者がたくさんいて、地域リーダーの輩出の場だった」と言われたいと思っています。県内のどこの活動団体のリーダーも活動の原点が小美玉の文化施設だったら、なんて誇らしいことでしょうか。

それを実現させるには何が必要なのか考えてみました。①どの世代の人も入りやすい“きっかけの場”②活動によって“成長できる場”③成長が個人の味になる“熟成の場”の3点です。特に大切だと思っているのが、若者が入りやすい“きっかけ”を作ることです。若者が集まることで施設は元気になり、元気なところには人が自然に集まるからです。

現在みの〜れではディベロップスクール(通称「DS」)という若者が企画の実行・運営をする若手リーダーを育成するチームがあります。そのDSに携わって感じたことがあります。それは若者が文化施設での活動にあまり興味を示さないということです。文化施設は真面目で特別な場所というイメージが強くて、若者が行く場所ではないと考えてしまっているのでしょう。過去の私もそうでした。しかし、DSの企画の参加者に感想を聞くと文化施設の特別な場所というイメージが変わったという意見をいただいています。参加してみれば意識が変わるんだなと実感しています。

これからの文化施設では若者を集めるために堅苦しくない“自由な環境づくり”が一つのキーワードになる気がしています。自由な環境が新しいアイデアを生みます。アイデアが生まれればチャレンジが生まれ、チャレンジが元気を生みます。いかに公的施設である文化施設で自由な環境が生み出せるのか。これは、文化施設そのものの可能性の追求・挑戦です。さまざまな決まりや壁があるとは思いますが、文化施設の可能性を最大限に発揮させるために何が必要なかをみんなで考えることが大事なのではないかと思います。

若者の視点で、こんな施設だといいな、こうすることが必要だなと考えたことを書かせていただきました。これからの文化施設をどう考えていくのか、何を重要視していくのかはこれからもいつも心の片隅に置きながらこれからも活動が続けていきたいと思えます。

### ◇実践モデル..アピオス小劇場チーム

#### 住民プロデューサー養成講座

小川文化センター活性化委員会では委員を二手に分けて事業を実践しています。平成22年度にはその1つがアピオス小劇場チームとして活動していました。その活動期間である8ヶ月間を「住民プロデューサー養成講座」と位置付け、館職員が講師となつて連続講座を行い、プロデューサーとは何なのか、企画を公演に仕立て上げるまでの過程、企画を立てるポイントや予算組みの仕方、新聞記者をゲストに招いての取材シミュレーション、おやじバンドコンテストやアピオス小劇場の裏方参加など、現場実習を交えて学びました。最終的には全員が企画を立て、一人ひとりプレゼンテーションを行い、活性化委員全員による投票を行なつて次年度のアピオス小劇場企画を

決定しました。

活性化委員会は委員が2年任期で交替となり、地域コミュニティや行政区でコト起こしできる人を育てて地域へ戻す、人材育成を行う社会機関としての役割を果たしています。

今後は活性化委員会卒業生が引き継ぎアピオスの事業企画ができるよう住民プロデューサー集団を創設したり、現場実習で裏方に興味を持った人が継続して舞台上に携われるような組織を立ち上げるなど、様々な住民参加・参画の体制づくりに努めていく必要があります。また、他館においても様々な住民プロジェクトの現場で住民プロデューサーを育てることに着眼することで、異なるジャンルの個人やサークルをつなげる人、あるいは地域と文化ホールをつなげる人たちが出てくるようになって、

元気を生み出すサイクルが生まれていきます。

### ◇実践モデル..

#### みの〜れ舞台表現ワークショップ

「みの〜れ舞台表現ワークショップ(以下、舞台表現WS)」と「みの〜れ住民劇団 演劇フアミリーMYU(以下、MYU)」の関係がこの実践モデルのひとつです。舞台表現WSは年度前半におおむね2〜3ヶ月の期間で開催され、館が主催して一般公募し、プロの演出家のもと一つの演劇作品づくりを行うものです。募集するのは役者体験希望の小学1年生から大人までで、経験の有無は問いません。いわば「演劇やコミュニケーションを学びながら、舞台づくりを知る学校」です。一方、MYUの役者もプロの指導を仰げるため参加を希望

し、MYUのスタッフは作品づくりを全面支援します。初めて参加する人は、①館が募集すること(安心感)②期間が限定されていること(入団するより遥かに敷居が低い)が参加の後押しとなり、MYUの役者やスタッフと一緒に舞台づくりを行う過程で仲間意識が芽生え、舞台表現WS終了後にはほぼMYUに入団します。MYUは、舞台表現WSをプロから学べるうえに新規団員を獲得できる機会(充電)と捉え、年度後半に自らのオリジナル作品づくり(放電)に生かしています。

# 住民主役・行政支援

## 2. 住民主役・行政支援

### 「文化パートナー」という考え方

「住民参加（行政主導）→住民参画（協働）→住民主役（行政支援）」という活動の成熟過程に伴う参加参画の仕組みの中で、住民参画からさらに進化した「住民主役（行政支援）」のあり方について触れていきます。

住民と行政（館）が共に時間と想いを共有しながら進めていく「住民参画」は、館職員が抱える仕事量の限界が活動量や活発化に歯止めをかけて

しまいます。そこで、文化ホールと価値観を共有し本計画を理解している住民スタッフや表現者が、自ら活動内容と館に求める支援について明示し、館や小美玉市の看板を背負って活動する「文化パートナー」になり、「住民主役（行政支援）」による事業推進を実現していきます。

### ポイントは「三方よし」

この取り組みが活発に活動していくようになれば、館職員はますます新たな参加参画の輪の拡大に力を注ぐことが可能となり、人事異動してきた職員も新たな住民と共に成長することができます。一方で習熟した住民にとって、館職員の容量オーバーが住民参画活動の限界とされるよりも、自由にやりがいのある活動を行うことが可能となります。館職員は常にその活動内容を把握し精神的に寄り添いつつも、実際の拘束時間は減少します。

この取り組みは、小美玉3館をはじめとした文化圏のあらゆるところが活動のフィールドとなり、文化ホールの活動として地域活性化に一役買って出ることを考えているか、その企画が『三方よし（近江商人の経営理念「売り手よし・買い手よし・世間よし」）』となるかがポイントです。

### 住民主役（行政支援）の事業推進

自ら活動内容と館に求める支援を明示して、館や小美玉市の看板を背負って活動する「文化パー

トナー」が、3館とどのようにして手を結んで活動していくかを考えてみました。

### ◇試行イメージ◇

#### 文化パートナーとの手の結び方

①文化パートナーになろうとする個人や団体が、自らの活動内容と館に求める支援を明記した企画書を用意します。

②年に一度、3館の自主事業企画委員（四季文化館企画実行委員、小川文化センター活性化委員会、コスモスプロジェクト）が一堂に会し、文化パートナー希望者からプロポーズを受けます。

③3館の委員は持ち帰って検討し、プロポーズの返事をします（逆に条件提示もあり）。

④次年度4月1日～3月31日までが活動期間となります。

### ◇実践モデル…みのり太鼓

平成4年に創設。東京・青山で開催された第1回創作和太鼓コンテストでグランプリに輝くなど、全国トップレベルの創作和太鼓集団です。みのりれが企画したリズムワークショップのノウハウをアレンジし、独自の和太鼓ワークショップを開発しました。



みのり太鼓とみのり〜れの連携により開催している「太鼓教室」。住民・みのり太鼓・館の三者にとつて三方よしの企画となっている。



小松崎由美子

小美玉市まるごと文化ホール計画  
策定プロジェクトチーム

## 思いは繋がる…のね。でも

生涯学習センターコスモスを活性化させる「コスモスプロジェクト」が立ち上がってから今年で3年目。中村補佐の「やっちゃいましょう！」という勢いある言葉に押され、昨年からの予算ゼロの中で企画を立ち上げました。不定期でいささか無計画。素人臭くはあるけれど、数回のイベントを実施し、客数は回を重ねるごとに増えていっているというのが今の現状です。

「思い」を「カタチ」にしたとき、独りでよがることなく、スタッフ同士が支えあい、来場して下さったお客様が「感動」を持ち帰ってくれる様子は、時間やガソリン代をかけながらも「言ってよかった。やってよかった」と、他には換え難い思いを得ることが出来ます。(これはみの〜れとアピオスという先輩がいたからできたことです！)

しかし、出産に例えるならば「やっちゃった(企画)」「産んじやった(実施)」…そのあと「どう育てたらいいの?(今後)」という壁にぶち当たってしまいました。(みの〜れとアピオスは上手に育てて成長しているのに…)

### 私は何処に行きたくて、こんなに走り回っているのだろうか？

そんな思いを漠然と抱き始めた頃、この座談会に参加することになりました。第1回目の「星の下」での座談会では、お互いがよく見えないというのが利点になり、顔色を伺うことなく、素直に自分のこの“迷い”を言葉にすることができました。その言葉をみなさんが温かく受け止めてくれてとても安心しました。第2回目の座談会では、「文化をビジネスとして活かしていく」という高田氏の言葉に衝撃を受けました。思っている、「清く正しい文化」の前では口に出せなかった言葉だからです。第3回目の熊倉氏の、限られた時間の中で、自分の文化に対する思いなどを惜しみなく語る勢いに圧倒され、開催中は言葉が出せませんでした。「無償であることの公平さ」「バトナムの“結束型”と“橋渡し型”」には深く共感しました。4回目のツリー構造化は、目先で走り回り、全体を考えていないと自己批判気味だった私が、実は「まち」を育てるために走り回っているのかも?という「繋がり」が見え、励みになりました。5回目の群馬交響楽団との座談会。戦後間もなくプロ化し、**社会活動**にも積極的に取り組んできたことを初めて知り、高崎市の子どもたちに嫉妬しました(笑)。

今なお「特別な領域の人たちのもの」と捉えられがちな“文化”は、あらゆる人間の“精神世界”という内側の土壌を耕す上で、とても大切なものだと思います。

文化は目には見えない。でも人間として欠かすことのできない文化が、こうしてもっともっと身近に感じられる「場」を増やし、文化を遠い存在としてしまっている方々に身近に感じてもらえるような、「橋渡し」ができれば、ここに今在る自分に自信が持てる気がします。

**お母さんの活き活きた姿が何よりの子育て(大切な次世代へのバトン)**  
文化は案外、こんな部分から成り立っているのではないかと思っています。そんな私に「それでいいんだよ」って答案用紙をハナマルで返してもらえたような、そんな座談会でした。

必要な道具や講師はみのり太鼓がまかない、みの〜れは会場を提供するパートナーシップのもと、10年近く和太鼓ワークショップを開催し続けてきました。創作和太鼓のリズムを体験できるこのワークショップは、全国トップレベルの和太鼓奏者と一緒に和太鼓を体験できる取り組みとして参加者に喜ばれています。館としては地元の宝であるみのり太鼓と提携することでも和太鼓文化の普及ができます。みのり太鼓としてはワークショップの開催と成果発表会の開催により公演鑑賞者の拡大と新たな担い手の創出につなげることができると、ワークショップ参加費をみのり太鼓の活動費(太鼓の皮の張り替え、稽古場や移動トラックの維持費など)に充てることができます。

住民(ワークショップ参加者)、館そして

みのり太鼓の3者が三方よしの仕組みとなつています。

### ◇実践モデル◇

#### おみたまチンドンジャグバンド

みの〜れと商工会による一大祭り「四季の里さくらフェスティバル(現小美玉さくらフェスティバル)」のプロジェクトから生まれた、チンドン屋でもない、ただのバンドでもない、手作り楽器を加えた新たなジャンル「チンドンジャグスタイル」を確立。町村合併時には地域アクティビティの一環として行政区や地域コミュニティへ訪問。交流を深めて市の一体感の創出に大きく貢献しました。

昔なつかしいメロディを移動しながらどこでも演奏する機動力に魅力を感じた地域からはオフアワーが殺到しており、館としては行政区や地域コミュニティと

みの〜れの橋渡し役になり、信頼関係を構築してくれる存在としてかかせない存在になっていきます。バンド側は、みの〜れと手を組んで地域アクティビティを行うことで、みの〜れの看板を背負っている誇りを持ち、地域への認知度を上げる機会を得ています。地域の認知度があがることで新たなメンバーを確保出来るようになります。そして地域からのオフアワーをできるだけ受けられるようにして活動を充実させていくことがバンド側の希望です。



みの〜れで出逢った演劇人と音楽家が結成した「おみたまチンドンジャグバンド」。地域からの演奏依頼が多く、館と地域の橋渡し役となっている。